生き物に愛着をもち、自分の思いを表現する子の育成

―「生き物博士になろう」の実践を通して―

１　主題設定の理由
２　研究の仮説
３　研究の手だて
４　単元計画
５　研究の実践と考察
６　成果と課題

第２４分科会
総合学習と防災・減災教育
Ａ－１ものづくり・生活の中から

近藤　香奈子　（春日井・岩成台小）

研究の概要報告

第６分科会　生活科教育　研究の概要報告

１　県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

2020 年２月下旬より流行が始まり、猛威をふるい続けたコロナウィルス感染症のために、2020 年３月から５月にかけて全国的に休校となった。また、休校が明けても数多くの活動が制限され、さまざまな活動や体験が制限されるばかりか、子どもたちの対話や協働的な学びの仕方等にも大きな影響が出た。体験や活動が基盤となっている生活科の学習への影響は、いうまでもない。しかし、そんな中でも教員たちは必死になって子どもたちの学びを途切れさせまいと奮闘を続け、制限があるなかでの生活科の学習のあり方を模索し、実践を継続させた。

これまでとは、アプローチの仕方が異なっていても、従来通り、一人ひとりの子どもの思いや願いを大切にし、それを実現していくこと、そして、対象や他者とのかかわりを通して気付きの質を高めることなどを重点として、子どもの意識に沿った学習を構成し展開していこうとする質の高い確かなとりくみがなされた。実践報告では、個々の子どもの姿を丁寧にみとり、目の前にいる子どもの実態に応じた手だてを講じ、子どもの姿で分析、考察、検証された確かな実践が数多く報告された。

２　教育研究集会で論じられた内容

（１）　１年生という発達段階に応じて実践された報告（８本）

１年生における栽培活動のあり方、しゃぼんだまやあきのおもちゃなど、２年生のおもちゃ単元へと続く活動、秋の自然を感じ取る活動、他者のかかわりを通して自分自身の成長に気付く活動等が報告された。全体として、異学年や学外の人との交流を通した活動についての報告は少なかったが、これはコロナウィルス感染症蔓延による影響であり、子どものいのちを守っていくためにはし方のないことであった。そうした中でも最大限の注意が払われて行われた活動については、どのような配慮がなされていたのかといったことが話題となった。栽培活動を行うときには、いのちのつながりといった視点からもとらえ、種がどのようにできるか、それがどのように受け継がれていくのかといったことも考えてみると子どもたちの新たな気付きを生み出すことができるのではないかという指摘があった。

（２）　２年生という発達段階に応じて実践された報告（７本）

自分自身の成長に気付かせていくことを視点とした活動、野菜の栽培活動、おもちゃづくりの活動の報告があった。後半の報告は、おもちゃ単元についてのものが半数を占めた。野菜作りにしろおもちゃ作りにしろ、子ども自身が自分の手で自分の野菜を育ておもちゃを作っていくことで、興味関心は高まり、そこに多くの気付きが生まれるということが確認された。興味関心の高まりは、そのまま表現力の高まりにもつながり、書く力も生活科の充実によってかなり高まっていくということも報告され、議論された。

（３）　総括討論

総括討議は、発達段階に応じた体験活動、振り返りの工夫、他者とのかかわりの３点を柱として行われた。発達段階との関連では、おもちゃ作りの活動を理科にどれだけ近づけていく必要があるのか、振り返りの工夫としては、ICT を活用した感想の交流、他者とのかかわりでは、コロナ禍におけるかかわりのあり方といった課題が出され、討議が深められた。WEB 開催で顔を突き合わせてというわけにはいかなかったが、ICT 活用意義あるいは課題等、これまでになかった観点の討議も生まれ、オンラインという制約を感じさせない実り多い会となった。

（原田　三朗　　朝倉　有利子）

報告書のできるまで

全県で 15 本のリポートが提出され、熱心な発表、質疑、討論が行われた。本年度、感染症拡大防止の観点から県教研はインターネットを通じて開催され、オンライン上で、実践報告が行われた。

助　　言　　者	原田　三朗（四天王寺大学）	朝倉有利子（豊橋・牛川小）
教育課程研究委員	藤原真奈美（名古屋・西築地小）	村瀬　真弓（一宮・末広小）
	八代　知里（豊田・堤小）	東江　克佳（名古屋・八熊小）
	水上　麻未（春日井・西尾小）	石川すま子（みよし・北部小）
	一柳　聡志（名古屋・神宮寺小）	

１　主題設定の理由

学校の周りには畑や田んぼ、林が広がっており、とても自然豊かである。通学路にカメが歩いていたり、校舎裏にヘビが出たりすることもある。そのような環境で育った子どもたちは、自然の生き物や植物に興味のある子が多い。１学期には、公園へ行き、草花で遊んだり虫を見つけたりして、楽しく春や夏見つけを行った。アサガオの栽培活動では、毎日水をやり、きれいな花を咲かせて嬉しそうにしていた。ツマグロヒョウモンの幼虫をクラスで紹介した時には、怖がりながらも触ろうとしていた。また、休み時間になると、校庭でカエルやトカゲ、バッタなどを探して捕まえる姿がよくみられる。しかし、生き物を捕まえることが面白いだけで、飼育ケースに入れたまま世話をせず、トカゲやカエルを死なせてしまうことがある。このことから、生き物に興味はあるものの、生命を大切にしようとする意識が低いように感じられる。

学習指導要領では、生活科においては、具体的な活動や体験を通して、意欲的に活動し、対象とかかわる中で思考を深めていくことが求められている。子どもたちにとって身近な対象である校庭の生き物とのかかわり方に変化をもたせることで、繰り返して子どもたちに感動体験を味わわせる。その体験をもとに、「もっと観察したい」「もっとやりたい」という意欲や願いを引き出していく。意欲的に世話を続けることで、生き物に愛着をもつ心を育んでいきたい。生き物に愛着が生まれれば、その思いを伝えたくなる。そして、どのように表現すれば相手に伝わるのか、一生懸命に考えていくだろう。このような姿を期待して、本研究をすすめることにした。

２　研究の仮説

意欲的に飼育活動をすることで、生き物に愛着をもつことができるだろう。また、自分の思いを表現する場を設定することで、生き物に対する思いを自分の言葉で表現しようとするだろう。

３　研究の手だて

（１）意欲的に生き物とかかわり、愛着を育むことができる場の設定

単元を通して、学習にストーリー性をもたせることで、生き物とのかかわり方に変化が生まれ、意欲的に生き物とかかわり続けることができるようになる。また、子どもの「やりたい」「知りたい」という思いを引き出しながら、学習を展開することで、飽きずに生き物とかかわることができるようにさせる。学びを深めるにつれて、生き物との心の距離を縮めていくことで、生き物への愛着を育ませる。

（２）自分の思いを表現する場の設定

具体的な体験や生き物との対話を通して気付いたことや考えたことを友だちにむけて言葉で表現させる。１つの単元を通して、体験と表現を往還させることで、だんだん深く思考していく。体験活動を繰り返す中で、愛着が高まっていくと、他の人たちに、大好きな生き物のことを伝えたくなる。また、大切に育てられた自分たちの姿を知ってほしくなる。そして、伝えるためにはどうすればよいのか必死に考えようとする。同じグループの友だちから、自分のクラスの友だち、他のクラスの人へ思いを表現できる場を広げていく。

４　単元計画（１７時間完了）

はじめよう

①どうして死んじゃったのかな

・食べ物がないのがいけなかったんだね。

・土を入れてあげたらよかったのかな。

次は、もっと上手に育てたいな。
校長先生みたいに、詳しくなりたいな。

生き物博士になろう

研究しよう

②生き物調査に出発：手だて（１）

・校庭には、どんな生き物がいるのかな。

・どの生き物の研究をしようかな。

③お家をつくって育てよう：手だて（１）

・棲みやすいお家をつくりたいな。

④秘密道具をつくろう：手だて（２）

・生き物の言葉がわかるようになる道具をつくろう。

・工夫したところを友だちに伝えたいな。

⑤秘密道具を使って観察しよう：手だて（１）

・餌を新しくして、バッタが喜んでいるよ。

・コオロギが「掃除して」って言っているよ。

⑥お悩み相談会を開こう：手だて（２）

・うまく育てられないよ。どうしたら上手に育てられるかな。

⑦生き物博士から話を聞こう：手だて（１）

・知らないことを教えてもらったよ。

・もっと棲みやすいお家にしてあげたい。

⑧⑨ビッグライト大作戦：手だて（１）

・生き物博士みたいな大きな生き物の模型をつくりたいな。

・形や模様をよく見てつくろう。

⑩みんなで話し合おう：手だて（２）

・世話していたのに、死んじゃったよ。

・このまま飼い続けていいのかな。

・生き物のためにどうすればいいか考えよう。

⑪お手紙を書こう：手だて（２）

・お別れの手紙を書くよ。今までありがとう。

・これからも、ずっと一緒だよ。

発表しよう

⑫～⑰研究発表会を開こう：手だて（２）

誰に伝えようかな

・６年生や１年生の他のクラスに伝えたいな。

研究発表会にむけて練習しよう

・はじめて知ったことを伝えようかな。

・紙芝居で伝えようかな。

・どんな言葉を遣うと伝わりやすいかな。

・前に書いた手紙の返事が届いたよ。

・生き物のかわいい様子を伝えようかな。

・クイズで発表しようかな。

・発表を見せ合って、もっとよくしよう。

研究発表会をしよう

・緊張したけど、上手にできたよ。

・他のクラスの人も喜んでくれたよ。

生き物博士になれたよ

５　研究の実践と考察

（１）どうして死んじゃったのかな

子どもが休み時間に校庭でトカゲを捕まえて来た。しかし、世話をせずに死んでしまった。１人の子が「死んじゃったよ」とつぶやいたことを受け、みんなで死んだトカゲについて考えることにした。死んだ理由を「食べ物がないから」と考えた子が多かったが、何を食べるかわかっていなかった。図鑑で調べ、トカゲの食べ物がわかると、「次は食べ物を用意してあげたい」と言っていた。「土がないのがいけなかったんじゃない」という発言を受けて、環境を整えることが必要であることに気付いた。また、校長先生が生き物に詳しいことから、校長先生のような「生き物博士になろう」という目標にむかって活動が始まった。

（２）生き物調査に出発～お家をつくって育てよう

どのような生き物が校庭に生息しているのか調査に行くことにした。畑・芝生・体育館付近などに行き、バッタ、コオロギ、カエル、カタツムリを捕まえた。どの生き物を研究するのか選び、グループを作り、生き物に名前を付けた。本で飼育方法について調べ始めると「コオロギは、キュウリと鰹節がいるよ。持って来られる人いるかな」「カタツムリは卵の殻がいるって。私が持ってくるね」「バッタは草とパンも食べるって。草はねこじゃらしだって。後で取りに行けるね」と積極的に話し合う姿がみられた（資料１）。

［資料１　飼育方法を話し合う様

次に、生き物たちの家づくりにとりかかった。コオロギグループが、図画工作で使用したお菓子の箱や、トイレットペーパーの芯などを家づくりに活用し始めた。「暗い所が好きだし、隠れ場が必要」「じゃあ、箱を切って斜めに立てかけよう」と話し合いながら隠れ場を作製した（資料２）。コオロギたちが隠れ場に入っていくと、「ひゅん君が隠れてくれた」と満足そうな顔を見せた。次に、食事処を作り始めた。そのまま下に食べ物をおくと汚いからと、ヨーグルトの蓋の上にナスとキュウリを置いた。また、「ヨーグルトの蓋の上にラップを乗せてからナスとキュウリをおくと、掃除が楽」と、工夫していた。コオロギグループの様子を見て、他のグループも箱や空き容器を使って、改良を行っていた。友だちと意見を出し合いながら、生き物が棲みやすい家を考えて作製することができた。

［資料２　完成した生き物の家］

（３）秘密道具をつくろう

１学期に、アサガオを育てた際にアサガオの気持ちがわかるようになる「秘密道具」をつくった。秘密道具を使って観察することで、アサガオへ一生懸命話しかけたり、アサガオの言葉を聞こうとする様子がみられた。その時のことを思い出し、「またつくりたい」と言う子がいた。そこで、新しい秘密道具づくりにとりかかった。お菓子の箱や牛乳パック、紙コップなどを組み合わせて、双眼鏡やカメラ、糸電話のような物をつくるなど、それぞれが秘密道具づくりに熱中していった。秘密道具作りが完成に近づくと、「みてみて。ここからのぞくとカメラになってカタツムリの写真が撮れるし、紙コップでカタツムリが話していることを聞くこともできるんだよ」と秘密道具の説明をする子が出てきた。説明している子の周りに１人・２人と友だちが集まり、道具を興味津々で見ていた。そこから、他の友だちに紹介する子、一緒に試してみる子、改良してみる子など、子どもどうしの交流が自然に行われた（資料３）。

［資料３　秘密道具の交流の様子］

（４）秘密道具を使って観察しよう

秘密道具が完成すると、すぐに観察したそうにしていた。早速、つくった秘密道具を使って観察を行うと、秘密道具を手にして一生懸命、バッタへ話しかけていた（資料４）。「リンゴを新しいのにしたら、『リンゴきれいにしてくれてありがとう』って言ってたよ。掃除してよかった」「『腐ったキュウリ嫌よ』って言っている。掃除しなきゃ」と、生き物の気持ちを考え、自分の言葉で表現していた。「もっとよく観察したい」という思いから新しい秘密道具を開発し始めた子がいた。小さな箱を透明なビニールで覆い、空気穴を付けた秘密道具をつくった。休み時間になると、新しい秘密道具の中にバッタを入れて、よく見ようとしたり、バッタの動く小さな音や声を聞こうとしたりしていた。また、自分が使うだけでなく、同じグループや他のグループの友だちに、秘密道具を使わせてあげていた。「この道具すごいね」と友だちから認めてもらい、満足そうな表情を見せていた。

［資料４　秘密道具を使う様子］

（５）お悩み相談会を開こう

ダンゴムシグループが、うまく育てられずに悩んでいたので、「お悩み相談会」を開いた。ダンゴムシグループが今の住処と育て方について説明すると、他のグループからのアドバ

イスとして、「他の餌に替えてみる」「水のあげ方を工夫する」という意見が出た。ダンゴムシグループは今まで、水場としてティッシュに水を含ませて置いていたが、「私のグループみたいにシュッシュするといいよ」という意見を受けて、霧吹きを持って来ることに決まった。自分の経験をもとに、アドバイスをすることができた。

（６）生き物博士から話を聞こう

目標としている生き物博士の校長を教室に招待して話を聞いた（資料５）。生き物について、子どもたちが知らないことを、クイズ形式で教えてもらった。初めは、座って話を聞いていた子も、話がすすむにつれて前のめりになるくらい熱中していった。カエルについての話では、種類によっては泳ぎが苦手であることや、腹から水を飲むことを教えてもらった。カエルグループは、博士の話を聞いてプールの改良を行った。今までは泳ぐためのプールであったが、泳ぎが苦手なカエルの水飲み場として使えるように、水の量を調節していた。また、校長が自宅で飼育している生き物を写真付きで紹介してもらい、珍しい種類の生き物や、飼育している数に驚いていた。生き物博士からの話を聞き、さらに「生き物博士になりたい」という思いが強まったようだった。

［資料５　生き物博士から話を聞く様子］

（７）生き物ビッグライト大作戦

生き物博士から話を聞いた時に、博士が持っていたバッタの模型（資料６）に子どもたちは興味津々だった。生き物博士に「ぼくも、それ欲しい」「つくりたい」と伝えていた。「みんなで作ろうか」と提案すると、「やったぁ！」「明日つくる？明後日？」とやる気に満ち溢れていた。「博士と同じバッタでいい？」と尋ねると、「バッタもいいけど、他のもつくってみたい」という意見を受け、自分たちが育てている生き物で作ることになり「生き物ビッグライト大作戦がスタートした。

［資料６　生き物博士のバッタの模型］

まず、新聞紙で体の形をつくった後、絵の具で着色した（資料７）。ダンゴムシグループは飼育しているダンゴムシが雌のため、背中の色が黄色がかっていることから、灰色の上に黄色を塗り重ねていた。また、お腹や脚の色は背中の色と違うことに気付き、色に変化を加えながらダンゴムシの模型を完成させた。カエルグループは、以前観察した時にワークシートにカエルを緑色で塗っていた子

［資料７　模型を作っている様子］

が、ビッグライト大作戦では、「何色で塗るの」と聞くと「茶色」と答えており、以前よりもよく見ていると感じられた。その後、背中に模様があることに気付き、黒で点々模様を付けて完成させた。自分たちが作り上げた大きな生き物の模型を抱きかかえて撫でたり「かわいいね」と話しかけたりしていた（資料８）。

［資料８　完成した模型］

（８）みんなで話し合おう

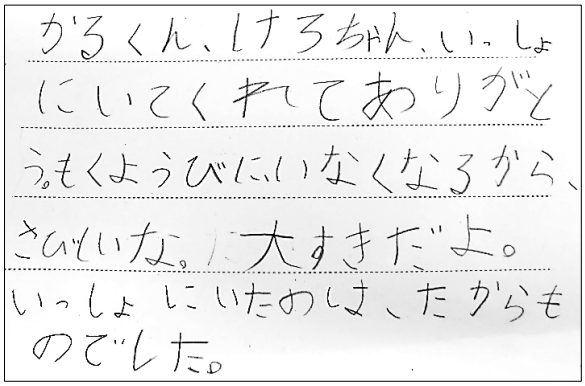
継続して世話を続けてきたが、死んでしまう生き物が出てきた。そこで、この先のことをみんなで話し合うことにした。まずは、クラス全体でみんながどのような意見をもっているのかを共有した。これからも飼い続けたいという立場からは「もっと一緒に過ごしたいから」「自分たちにとって仲間だから」という意見が出た。今まで一緒に過ごす中で、愛着が高まったからこそ出た意見である。逃がしたいという立場からは「同じ仲間と過ごした方がいいから」「お母さんたち家族と過ごさせてあげたいから」という意見が出た。大好きな生き物と一緒にいたい気持ちはあるものの、大切な存在だからこそ、逃がしてあげるべきだと考えていた。逃がす立場の子でも、「外に逃がすと、餌にされるかもよ」という他の立場の意見を受けて、「外で元気に過ごしてほしいのはあるけど、外に逃がして食べられちゃうくらいだったら、最後まで世話をしてあげた方が長く生きられるかも」と悩む様子もみられた。今まで一緒に過ごしてきた生き物の幸せのためにどうすればよいのか、友だちの意見も聞きながら真剣に考えていた。そのまま飼い続けるかどうかは、最終的にグループで話し合って決めた。意見が分かれてしまっても、自分の意見を伝えながら、相手の意見も聞き、お互いに納得できるように話し合うことができた（資料９）。

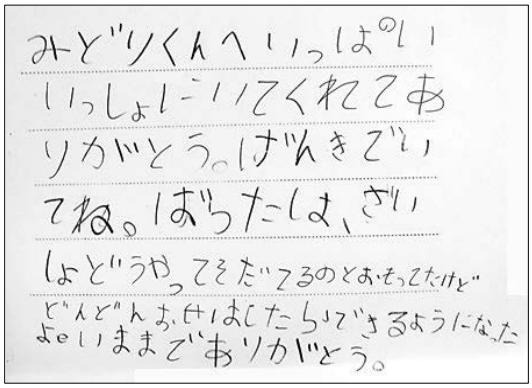
A　私は、まだ一緒にいたいから飼いたい。
B　私も、飼いたい。
C　僕は、飼わない。
A　なんで、飼いたくないの。
C　だって、死んじゃうかもしれないよ。
　　死んじゃった姿は見たくない。
B　死なないように世話すればいい。
A　餌、がんばってとれば大丈夫。
C　分かんないよ。餌あげても、病気になったら死んじゃうもん。
A　じゃあ、いつまでなら飼っていい？
　　最後は逃がすけど、もう少し飼おうよ。
C　明後日。
B　早すぎ。もうちょっと。
C　じゃあ、来週まで。
A　来週までなら、いいよ。
　　来週のいつ？２０分放課？昼放課？
C　昼放課がいい。昼放課に逃がそう。
B　それなら、いいよ。

［資料９　話し合いの様子］

逃がすグループはお別れの手紙を、飼い続けるグループは「これからもよろしく」の思いを込めた手紙を書き、手作りポストへ投函した。「(バッタの）みどりくんのお家に届くといいな」などと、それぞれが願いを込めて投函していた。「いつも、ありがとう♡たのしかったよ。もう、あえなくなるとおもうけど、おかあさんが見つかるといいね」と、素直に自分の気持ちを表現していた。「大すきだよ。いっしょにいたのは、たからものでした」という言葉からは、生き物に対する愛着が伝わってきた（資料１０）。また、「どんどんおせわしたらできるようになったよ」という言葉からは、自分の成長に気付くことができた

ことがわかった。


かるくん、けろちゃん、いっしょにいてくれてありがとう。もくようびにいなくなるから、さびしいな。大すきだよ。いっしょにいたのは、たからものでした。


みどりくんへ いっぱい いっしょにいてくれてありがとう。げんきでいてね。はらたは、さいしょどうやってそだてるのとおもってたけど どんどんおせわしたらできるようになったよ。いままでありがとう。

［資料１０　生き物への手紙］

（９）研究発表会をしよう～生き物博士になれたよ

今後のことをクラスで話し合った際に、ビッグライト大作戦で作製した生き物の模型を、他のクラスに見せたいという意見が出た。また、「自分たちの生き物のことを知ってほしい」という願いあることがわかった。

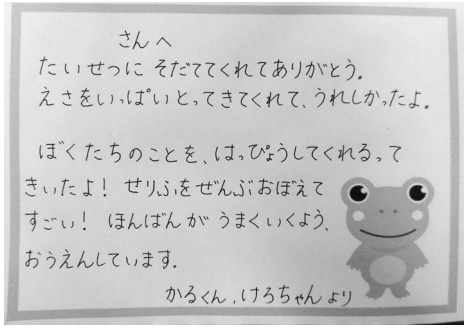
誰に伝えたいかについて考えると、６年生に伝えたいと言っていた。その理由として、「いつも通学班とかでお世話になっているから」「掃除で手伝ってくれているから」という意見が出た。また、６年生だけでなく、１年生にも伝えたいといと思っていることがわかった。それは、「他のクラスも、同じように生き物の勉強をしているから、自分たちの発表を聞けば、もっと勉強になると思うから」という理由だった。そこで、お世話になっている６年生、ともに勉強している１年生の他のクラスへむけて、研究発表会を行うことにした。

カタツムリグループは、食べ物やカタツムリの家についてなど、伝えたいことがたくさんあるようだった。最終的に、自分たちがかわいいと感じた動く様子について発表することになった。カタツムリの動きをもう一度よく観察し、裏から見ると波のように体を動かしていることに気付いた。発表方法は、紙芝居のように絵でまとめることになったが、波のように動いていることをより伝えるために、手で動きも付け加えていた。その他のグループも話し合い、クイズを取り入れたり、劇形式にしたりと発表方法を考えていた。発表原稿はすべて子どもたちが考えた。

発表がスムーズにできるようになってくると、互いに見せ合うようになった（資料１１）。「紙は横を持つと見やすいよ」などアドバイスをしていた。発表本番が近づくにつれて、「もっと上手に発表できるようになりたい」と、休み時間にも発表練習をするグループが出てきた。「６年生役をやる」と、他のグループの子も練習に自主的に参加していた。クラスで本番前のリハーサルを行った。「大きな声で言えていて良

［資料１１　練習を見せ合う様子］

かった」と友だちから褒めてもらい、自信へとつながっていった。子どもたちの発表への意欲を高めるために「実践（８）で書いた生き物の手紙の返事がきた」という設定で一人ひとりへ返事を書いた（資料１２）。返事には、がんばって生き物の世話をしていたことを褒める言葉や、研究発表会へのエールを記した。手紙の返事は、グループごとにまとめて封筒に入れて黒板に貼り、周りには生き物のイラストを描いた（資料１２）。朝、子どもたちが登校すると「何、これ？」とランドセルを背負ったまま、驚いていた。黒板の近くでイラストや手紙を見たり、触ったりしていた。「生き物さんたちから、お手紙のお返事が来たんだよ」というと、「読みたい」とうずうずしていた。その後、グループごとに封筒を黒板から外して、手紙を読んだ。自分の手紙を読み終わると、友だちの手紙が気になるのか、隣の子の手紙をのぞき込んでいた。「褒めてくれている。嬉しいな」「発表がんばろう」という声が聞こえてきた。



［資料１２　生き物からの手紙の返事］

［資料１３　返事を黒板に掲示した様子］

発表本番、クイズに積極的に答えたり、拍手をしたりする６年生の温かい雰囲気もあり、１年生の子たちはだんだん笑顔で発表できるようになっていった（資料１４）。台詞を忘れてしまう場面もみられたが、グループ内で助け合っていた。発表後「緊張して『言えない』と思ったけど、大きな声で言えて、めっちゃいい気持ちだった」「準備の時にみんなで力を合わせたから、自信をもって言えたよ」と振り返っていた。一緒に過ごしてきた生き物のことを伝えるために、内容や言葉を考え、修正しながらよりよい発表をつくりあげることができた。

［資料１４　６年生へ発表する様子］

「生き物博士になろう」の授業を始めた時から、子どもの活動の様子を写真にまとめて掲示をしていた（資料１５）。最初は「いきものはかせへのみち」、間を空けて、終わりに「ごうる」と掲示をしておき、実践が１つ終わるにつれて、間を埋めていった。研究発表会が終わりゴールしたところで、生き物博士認定式を執り行った。博士から認定書を受け取り、嬉しそうにしていた。

［資料１５　掲示の様子］

６　成果と課題

（１）成果

手だて（１）意欲的に生き物とかかわり、愛着を育むことができる場の設定

掃除や餌の調達という日々の活動だけでなく、子どもたちからの「やりたい」という思いをもとに、「お家をつくる」「秘密道具で観察する」など、生き物とのかかわり方に変化をもたせることで、単元を通して、意欲的に生き物とかかわりながら愛着を育むことができた。授業の時間だけでなく、休み時間にも秘密道具を使って生き物を観察したり「広い所で遊んで」と飼育ケースから出して話しかけたりする姿がみられ、生き物が大好きという気持ちが伝わってきた。また、飼育活動を終えた後も休み時間にバッタやトンボなどを捕まえてくることがあったが、死なないように下校までに逃がしたり、餌を飼育ケースに入れるようにしたりと、命を大切にする様子がみられるようになった。

手だて（２）自分の思いを表現する場の設定

具体的な体験や生き物との対話をした後に、感じたことや気付いたことを自分の言葉で表現できる場を設定した。グループで飼育活動を行ったことにより、友だちとの対話が活発に行われた。体験と表現の往還がしやすくなり、単元がすすむにつれて深く思考するようになっていった。

単元の後半「みんなで話し合おう」では、いつまで生き物を飼育し続けるかについて話し合った。もっと一緒に過ごしたい気持ちを抱えながらも、一緒にいるだけが幸せでないかもしれないと悩んでいた。大好きな生き物だからこそ、今後幸せに生きてもらうためにはどうすればよいか、真剣に考え、自分の言葉で伝えようとしていた。

「研究発表会をしよう」では「自分たちの生き物のことを知ってほしい」という願いが実現できるよう、発表の場を設定した。どうすればうまく伝わるのか、どうすれば楽しんで聞いてもらえるか考えながら、発表方法や内容、発表原稿をすべて自分たちでつくりあげていった。そして、「もっとこうするといい」「ここがよかった」と自分のグループだけでなく、他のグループとも一緒になって、よりよい発表の仕方を考えることができた。

（２）課題

本実践では、ＩＣＴを使用しなかった。ＩＣＴを有効活用することで、より深く思考ができる手だてを考えていきたい。

（３）終わりに

生き物たちに話しかけるなど、一緒に過ごす中で愛着を育み、子どもたちにとって特別な存在となっていった。途中で死んでしまうこともあったが、墓を作って、手を合わせる姿がみられた。９月、自分たちが育てた花で彩られた墓、１１月、公園探検に行った後にドングリであふれた墓、１月、「寒そうだから」と草が周りに敷き詰められた墓、単元が終わった後も忘れることなく、生きていた命を大切にしていた。「２年生になったら、次は違う生き物を育ててみたいな」と笑顔で言っていた。愛情をもって育ててくれたこの子たちなら、きっと、次に出会うであろう命も大切にしてくれるだろう。